死者の月に想う

打　樋　啓　史

キリスト教の暦では 11 月は「死者の月」。この暦を最初に用いたカトリック教会では、11 月 1 日の「諸聖人の日」（All Saints' Day）にすべての聖人と殉教者が記念され、その翌日 11 月 2 日の「死者の日」（All Souls' Day）には世を去ったすべての信者のために祈りが捧げられる。日本のプロテスタント教会では、11 月の第 1 日曜日が「聖徒の日」とされ、教会ごとに逝去者記念礼拝が守られ、皆で教会の墓地にお墓参りをすることも多い。

また、 10 月 31 日のハロウィンは、 もともと古代ケルト民族が死者との交流による新しい生命力の回復を願った土着の祭りであったが、ケルト民族がキリスト教化されてからは「諸聖人の日」の前夜祭として残ったものである。カボチャをくりぬいたお化けのちょうちんを作るなどの習慣は、これが死者に関わる祭であることに由来する。日本ですっかりおなじみのハロウィンも、実はキリスト教の「死者の月」と関連するものなのだ。

これら死者の月のキリスト教行事では、生者と死者の交流がテーマとなる。生者は死者を記念するなかで、愛する人々が世を去った今も神の永遠の命のなかで共にいることを信じ、慰めを与えられる。日本で 8 月に祝われるお盆は祖先の霊が帰ってくるのを迎える行事だが、キリスト教の「死者の月」の行事はある意味でお盆とも共通性をもつと言えよう。

さて、このような死者に思いを向ける季節に、私たち生者は普段忘れがちな大切なことに気づくことができるのではないか。それは、今ここでの日々がいつまでも続くものではなく、私たちもいつか必ずこの世での生を終える時がくるということ。その限りある日々を、この私は何を大切にして、どのように生きていくのか。死者を憶えることを通して、私たちはそのような本質的な問いに向き合うことになるのだろう。

さらにこの季節は、「死者の視点」で自分自身とこの世界を眺める機会にもなる。人生の道を歩き終えた人々の視点からその途上にいる自分を眺めると、自分が何でも分かっているかのような傲慢は戒められ、目の前のことが世界のすべてであるかのように切羽詰まった感覚は和らげられる。そこからこそ、もっと謙虚に、もっと大らかに、人生の道を歩み出すことができるではないか。この学院に連なる私たちが、死者の月を過ごすなかで、少しでも自分の心の眼を死者の視点に重ねることができればと願う。

（社会学部宗教主事）